

小

説を読むのに時を選ぶ必要なんてないのだけ
 ど、「近代文学五十選」に挙がっているような
 重厚な作品にはおいそれと手が出せなかった。そんな
 のただの言い訳だとはわかってはいるが、勤めてからは
 いつも頭の片隅にひっかかっていることがあって、
 どつぷりと作品に浸るなんてできなかった。それだつ
 てそんな気がしただけなのだろうが、なかなか長編を
 集中して読むだけの余裕もなく、またひよいと時間が
 できたとしても、そんなときはほかの優先事項がしゃ
 しゃり出て、「五十選」の出る幕はなかった。だが消
 えたわけではなかった。それが証拠に、退職したら再
 び表に出てきた。

高校時代は、読んだからには影響されないといいな
 い気がして、主人公とともに悩んでみたり、登場人物
 の思想を友達にうる覚えで語ってみたりしたが、さす
 がにこの年になるとそんな力みは消えた。読めば理解
 できるなんて幻想だし、そもそも道楽の読書だ。わか
 ろうがわかるまいがどつちでもいい。読了と同時にぎ
 れいさっぱり忘れたところで、だから無意味、とも思
 わない。読んでいると、ストーリーとは別に文や言葉
 から引き出される記憶があるもので、それだけでもよ
 かったがや、と思う。どんな不屈な読者も包み込む
 ように迎えてくれるのが「近代文学五十選」なのだ

と今は思う。

トルストイは、『アンナ・カレーニナ』が選ばれて
 いるのだが、やっぱり『戦争と平和』を一度は読んで
 おきたいと思つて手にした。ついていけなくなつたら
 今の自分には合わなかつたというだけのことだ。ここ
 ろが読み始めたら止まらなくなつた。世界中で読み継
 がれる名作というのは、まずもつておもしろいのだと
 再認識した。光文社の古典新訳文庫が昨秋完結したば
 かりで、タイミングにも恵まれていた。読了すると続
 けて同じ訳者の『アンナ・カレーニナ』を読んだ。半
 月以上トルストイを読み継いだ。まずそんな時間に恵
 まれたことがうれしかった。仕事していたつて読めた
 かもしれないのだが、ずっとそんな気になれなかつた
 のだから、自分にはそれだけの容量がなかつたとい
 うことなんだろう。

ロシアがウクライナに侵攻してからというもの、
 ニュースが気になってならない。『戦争と平和』は、
 歴史理論にも多くのページが割かれているのだが、中
 でトルストイは、戦争のような歴史的事件は個人に原
 因が帰せられるようなものではないと繰り返して述べ
 ている。「プーチンのプーチンによる……」などと言われ
 て、ついそんなイメージを抱きがちだけど、トルスト
 イならどう描くのだろうとよく考える。

専業ババ奮闘記(その2) 94

木幡智恵美

整理 (1)

コロナ禍なので、身内だけで葬儀を済ませた。我が家の三人、義姉と二人の姪の家族、
 娘一家だけで。長男は帰ると言つて聞かないが、県外者との接触があると全員二週間身動
 きできなくなるからと説得し、断念させた。しばらくは、「新聞で見た」と言つて、近所
 の人たち、昔からの知り合いが弔問に来られ、家を空けることができなかった。
 入院、そしてショートステイと四箇月余り、義母の居ない三人の暮らしが続き、その延長
 線上の日常が続いているだけなのに、心の中のある部分がすっかり抜けてしまつてい
 る。今頃また「帰りたい」と職員さんを困らせていないだろうか心配することがなくなつ
 た。「紙オムツをそろそろ補充しなくては」と気を回すこともない。ただ、「居なくなつ
 た」ということが、常に頭の中に居座っている。わずか十日ほどの間に、学生時代共に汗を
 流した同期、義母と身近な死が続いたから余計かもしれない。時間の流れに身を任せなが
 ら、宙を遊泳しているような心持ちでいると、四十数年前のことを思い出してしまつた。
 同じように寒い時季、しばらく所在不明になつていた父の死が知らされた。突然、変わ
 り果てた姿を目の当たりにしたせいかわ、受け入れるのに時間を要した。半年くらい滞つてい
 たように思う。視界の隅に黒い影のようなものが時折現れるし、今でも思い出すと悪寒が
 走る不気味な夢を見た。自分が土の中に埋められていて、じわじわと体液が身体から染み
 出ていく。身体は死んでいるのに、意識だけははつきりしている。何とも言えない不快な
 感覚が続いたかと思うと、突然意識が途切れた。すぐに目が覚めたので、一瞬のことだつ
 たが、自分という意識が無くなり、漆黒の闇に吸い込まれる恐怖は忘れることができない。
 その頃はまだ母が居たし、職場の先輩方や初めて受け持った子たちに支えられ、また、
 「風と共に去りぬ」全五巻に助けられ、何とか長いトンネルを抜け出すことができた。
 義母とは、実の母との暮らしの倍近くを過ごした。生きた時代も育つた環境も違い、す
 れ違いは多々あつたけれど、何せ共に生活した時間の蓄積が大きいのだ。雲の上を歩くよ
 うな日々は当分続くだろう。しかし、時は容赦なく流れて行く。寛大の入学、宗矢の保育
 園入所が迫っている。心の整理はひとまず置いて、物の整理はすぐにでも取り掛から
 なくては。



30代フリーター やあ、ジイさん。ウクライナで苦戦するロシアが核を使うのではないかという懸念は、ひとところほど切迫感をもって語られなくなった。年金生活者 ロシア軍が全土の制圧をあきらめ、東部に戦力を集中しだしたからだろう。

東部でのロシア軍の任務は都市の壊滅ではない。政権を倒すことが目的ならそれも有り得るが、目標はこの地域の占領と実効支配の確立だ。それには核は役に立たない。

ただし、核使用の可能性は依然として指摘されている。「欧米などの軍事介入が想定される時や、ウクライナを降伏させたい時にあり得る」（小泉悠、4月7日読売新聞オンライン）。だが、今の段階では「欧米などの軍事介入」は想定されていないし、ロシアは「ウクライナを降伏させ」る方針を当面は棚上げした。

30代 「まさか」のウクライナ侵略をしたロシアのことだから、「まさか」の核使用もあり得るという想定は拭い

30代 核兵器を「主権国家の上に立つ最高権力」と考えると、アメリカは広島、長崎に原爆を投下したとき「国家の上に立つ権力」になったという見方に行き着く。

年金 そうではない。核は最初アメリカという主権国家の権力の一部になった。それが核の拡散とともに超国家的な権力に変容していった。

アメリカが広島と長崎に原爆を投下したとき、他の国は核を持っていなかった。通常兵器をはるかに超える破壊力の発現は、核という新たな権力をアメリカが手にしたことを意味したが、それはまだ国家を超える権力ではなかった。

30代 いつから変わったんだ。

年金 ソ連が1949年に初の核実験を行うと、米ソを中心とした核開発競争が始まった。そのエスカレートとともに、核は米ソそれぞれの国家権力の一部にとどまらず、両国の間にまたがる権力としての性格を帯びだした。核の持つ破壊力がますます大きくなり、

去ることができない。

年金 そんなロシアでも、並はずれた代償を覚悟しなければならぬ核の使用は、できればしないで済ませたいはずだ。

核戦争を今まで抑えてきたのは核のけた外れの破壊力だ。核はそれ自体が使用を抑止する逆説的な兵器と言える。その「抑止力」を「まさか」のロシアも免れることはできない。

30代 核の破壊力の大きさを指して「主権国家の上に立つ存在がある」とすれば核保有が現代の最高権力」と主張するツイートを見た。

年金 だとしたら、その権力に縛りをつける核不拡散条約や核兵器禁止条約は主権国家の憲法に相当する。つけ加えるなら後者は非武装をうたう日本国憲法9条に似ている。これら「超国家的な憲法」は私たちを安心させるほどは機能していないが、核使用を抑える力になっていくことは確かだ。

30代 ツイートは「最終的には核を使用しうる能力を欠くと核を有する国の言い

一国だけでその運用を制御するのが難しくなったからだ。

核は米ソそれぞれの国家による管理だけでなく、両国による事実上の共同管理が行われるようになった。それが共倒れへの恐怖を前提にした「相互確証破壊」にほかならない。原爆投下から20年を経た1965年に当時の米国防長官ロバート・マクナマラが言い出した。

そのころにはすでにイギリス、フランスが核保有国に加わり、さらに19

なりになるしかない」とも言っている。

年金 それが核を「主権国家の上に立つ存在」とみなす根拠になっている。主権国家の権力が自国民しか支配できないのに対し、核は非核保有国を「言いなりに」、つまり支配し得るからだ。

ただし、この場合、核という権力は「破壊力」としてではなく、「威嚇力」として行使される。もし「破壊力」として行使されれば、この権力は支配の対象を失う恐れがある。破壊された国家は国家たり得ず、したがって支配の対象たり得なくなるからだ。別の面から見れば、権力のほうは権力たり得なくなる。

このことは核が「主権国家の上に立つ」権力だとしても、その行使にリスクをとまらぬ権力だということの意味する。言い換えれば、綻びが広がっている核不拡散条約であっても、また核保有国への法的拘束力がない核兵器禁止条約であっても、権力としての核を縛り得る余地があるということでもある。

64年には中国も初の核実験を行った。進む核の拡散を止めようと1970年に発効したのが核不拡散条約だ。そして核そのものをなくすことを目的とする核兵器禁止条約が半世紀後の2021年に発効した。

この両条約も、また相互確証破壊も、一国の主権を超えた「国家間システム」と考えることができる。2度の世界大戦で戦争のグローバル化が進み、東西冷戦では核のグローバル化が進行した。それとともに、核という権力の一部が個々の国家から国家間システムに移っていった。資本のグローバル化とともに国家の権力の一部が国連やEUといった国家間システムに移ったように。

30代 ロシアが核を使うのではないかという懸念は強弱の差はあっても、世界中で共有されつつある。

年金 そして、それに劣らず、核を制御する国家間システムがロシアを抑える力として働いていることもまた確かだ。

ニュース日記 827
中村 礼治

核という権力